

【今週の注目疾患】

《A群溶血性レンサ球菌咽頭炎》

2023年第10週のA群溶血性レンサ球菌咽頭炎の県内定点当たり報告数は0.39(人)であった。本疾患は季節変動性があり、例年冬から春にかけて増加する特徴が見られるが、2021年以降明らかなピークを形成せず、患者報告数が減少した状況が続いている(図1)。現状として警報開始基準値(定点当たり報告数8.0(人))を大きく下回っているが、地域によっては長生保健所管内(3.3(人))などで増加傾向がみられており、今後の発生動向に注意をはらう必要がある(図2)。

図1：A群溶血性レンサ球菌咽頭炎県内定点当たり報告数推移(5年間)

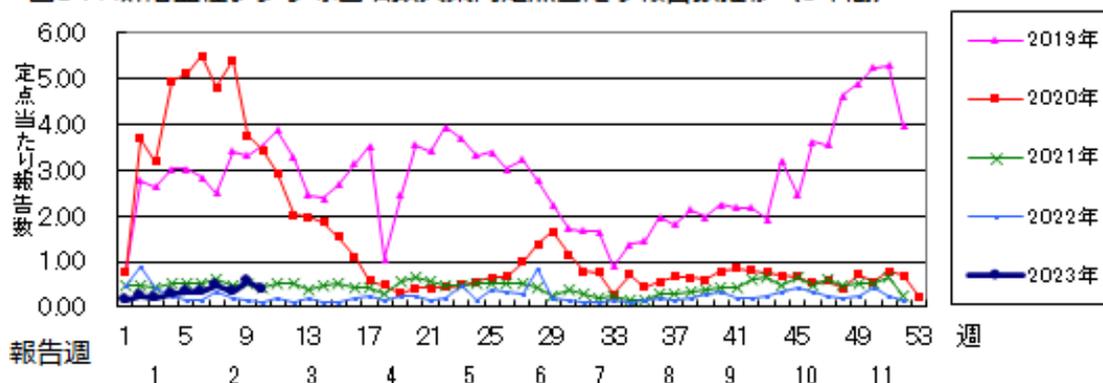
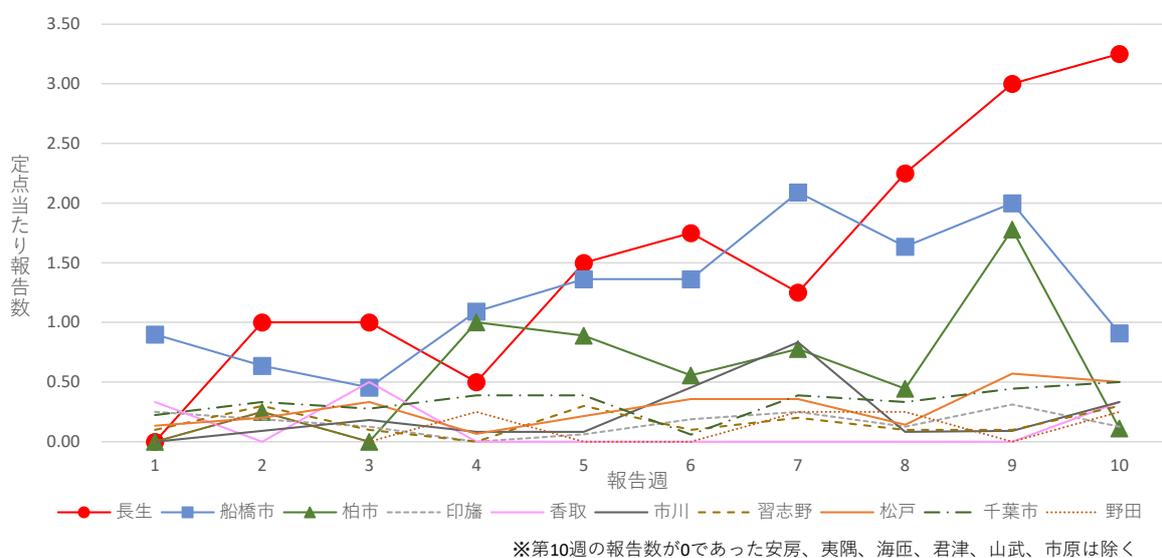


図2:2023年第1～10週の県内A群溶血性レンサ球菌咽頭炎定点当たり報告数の推移(保健所管内別)



2023年第1週から第10週までに県内小児科定点医療機関から報告のあったA群溶血性レンサ球菌咽頭炎の報告数は443例であった。年齢群別では、5-9歳が最も多く208例(47%)であり、次いで0-4歳114例(25%)、10-14歳86例(19%)であった。

A群溶血性レンサ球菌は、上気道炎や化膿性皮膚感染症などの原因菌としてよくみられるグラム陽性菌で、菌の侵入部位や組織によって多彩な臨床症状を引き起こす¹⁾。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎はいずれの年齢でも起こり得るが、学童期の小児に最も多く、3歳以下や成人では典型的な臨床像を呈する症例は少ない。本疾患は通常、患者との接触を介して

伝播するため、ヒトとヒトとの接触の機会が増加するとき起こりやすく、家庭、学校などの集団での感染も多い。感染性は急性期にもっとも強く、その後徐々に減弱する。

潜伏期は2～5日であり、突然の発熱と全身倦怠感、咽頭痛によって発症し、しばしば嘔吐を伴う。咽頭壁は浮腫状で扁桃は浸出を伴い、軟口蓋の小点状出血あるいは莓舌がみられることがある。予防としては、患者との濃厚接触をさけること、うがい、手洗いなどの基本的な感染対策が有効である。

《インフルエンザ》

2023年第10週の県全体のインフルエンザ定点当たり報告数は8.60（人）となり、前週（2023年第9週）8.51（人）から増加した。保健所管内別では船橋市15.88（人）、君津14.92（人）、習志野13.25（人）、松戸10.58（人）で定点当たり報告数10.0（人）を超えていた（図3）。

2023年第10週に報告のあった1814例のうち、A型1559例（86%）、B型29例（1.6%）、型非鑑別キットで陽性44例（2.4%）、検査未実施（検査実施未確認例含む）182例（10%）であり、A型が多かった。

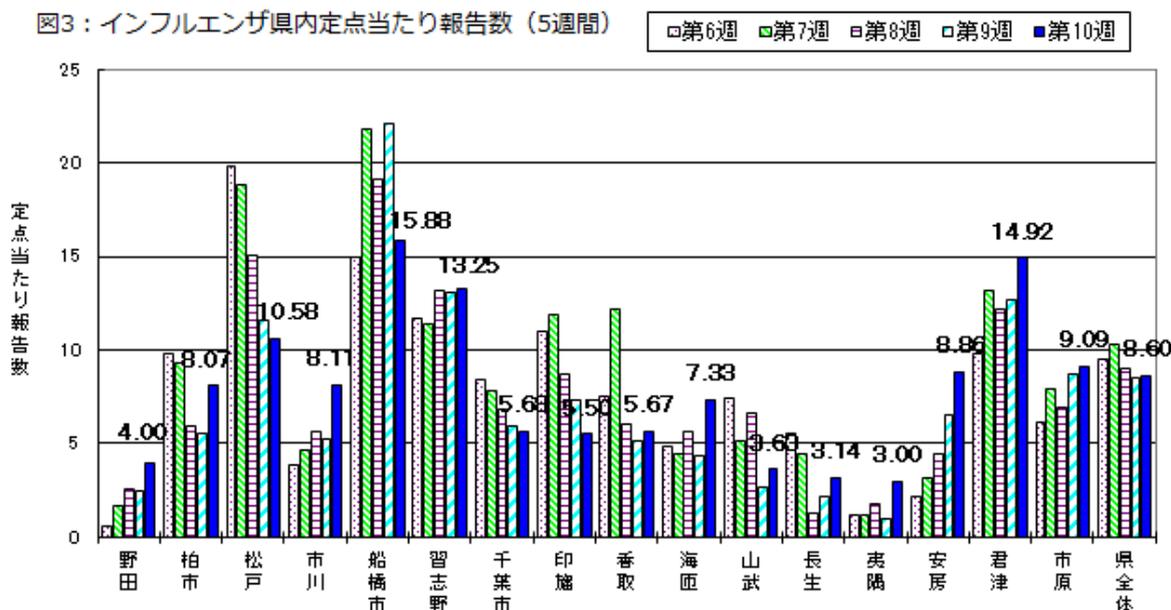
2023年第9週時点で全国の定点当たり報告数は10.17（人）であった。近隣都県の定点当たり報告数は、埼玉県10.63（人）、東京都8.34（人）、神奈川県11.35（人）であった。

引き続き、インフルエンザの予防対策を徹底していただきたい。

千葉県：インフルエンザから身を守ろう

<https://www.pref.chiba.lg.jp/shippei/kansenshou/influenza/influenza-yobou.html>

図3：インフルエンザ県内定点当たり報告数（5週間）



■参考

1)国立感染症研究所：A群溶血性レンサ球菌咽頭炎とは

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/340-group-a-streptococcus-intro.html>